

English Garden 第98話

"And the smell of rot fills the country."

John Steinbeck

「そして腐敗の匂いがこの地にたちこめる」 ジョン・スタインベック

スタインベックの『怒りのぶどう』の3回目です。

カリフォルニア州に到着したジョード一家は、ひとまず町外れの失業者収容部落フーヴァーヴィルに入りましたが、このキャンプの貧しさは想像以上でした。煮炊きの匂いでもさせれば、すぐにおなかを空かせた子どもたちが集まってきてしまいます。

みんな仕事がなく、どの家族もほとんど一文無しでした。故郷のオクラホマで見た果実摘み労働者募集のピラは、必要人数の何十倍もばら撒かれていました。仕事を求める人が多ければ多いほど、雇い主は安い賃金で雇えることになるからです。

そんなある日、果実摘みの労働者が必要だといって請負人が募集をはじめました。しかし、それまでも賃金は日に日に下げられていたため、ある若者が「許可証を見せて、場所と賃金をきめてほしい」と要求したところ、同行していた保安官に「こいつはアカだ」と引立てられそうになりました。そこにトムが割って入ったために騒ぎが大きくなりました。仮出所中のトムはつかまれば刑務所に送り返されます。一緒にいた元説教師のジム・ケーシーは、加勢が来る前に逃げろとトムに命じ、「身軽なおれが罪をかぶる」といって拘引されていきました。



さて、トムの妹のローズ(オブ・シャロン)と夫のコニーには、生まれてくる子どものために家を持ちたいという夢がありました。そのためコニーは、通信教育でラジオの勉強をして技術者になり、町の工場に勤めたいと思っていたのです。しかし、その夢も消え、彼は妻を残して行方をくらましてしまいました。

トムは、その夜キャンプが焼き討ちされるという情報を聞き込み、コニーが帰るまで待つといい張るローズをなだめて急いでフーヴァーヴィルを離れました。しばらくするとフーヴァーヴィルのあたりから火の手が上がり、叫び声や悲鳴が聞こえてきました。

夜更けに一家は運よくウィードパッチ国営キャンプに入ることができました。ここには洗濯湯やシャワーがあって、お湯も出ました。すべて自治制で中央委員会に運営がまかされており、警察も勝手に踏み込むことはできません。一家の人たちは久しぶりに人間らしい生活を楽しみました。

しかし、ここにも仕事はありませんでした。トムは小農場の土管を埋める作業で5日働いただけです。いまではこうした小農場も経営難で、銀行からの借金にあえいでいました。

いくら丹精込めて農作物を育てても、利益が上がらないからです。豊作で果物は買い叩かれ、黄色に色づいた梨の実が1トンで5ドルということでした。1個ずついいいに50ポンド(約25キロ)箱につめ、トラックで40箱を缶詰工場に送り届けてたったの5ドルです。収穫のための賃金も払えないので、実は地面に落ちるままにするほかありません。さくらんぼも、すももも、ぶどうも、みな同様でした。いずれこの小農場も、缶詰工場を持つ大地主が銀行のものになるのでしょう。

「そして腐敗の匂いがこの地にたちこめる」のです。表題の言葉は、その途方もない矛盾を表しています。技術の改良で新しい果物がたくさん実るようになったのに、「その果物を人に食べさせるシステムを作り出すこと」ができませんでした。その嘆きをさらに端的に表すのが次の言葉です。

"There is a crime here that goes beyond denunciation."
(ここには告発するくらいでは済まされないほどの大きな犯罪がある)

車で運ばれてきたオレンジは地面にぶちまけられます。人びとはそれを拾おうとして遠くからやってきますが、持ち主は拾わせてくれません。みんなが買わなくなって、値段が下がるからです。そこでホースを持った男たちが、オレンジの山に石油をかけていきます。彼ら自身、自分の行為にも、拾いにやってきた人たちにも腹を立てながら。

こうしてとうもろこしは焼かれ、じゃがいもは川に捨てられ、果物には石油がかけられます。ただ黙って見ているほかすべのない飢えた人びとの心を、作者は次のように代弁しています。「人びとの魂の中には『怒りのぶどう』がふくらんで次第に重く実り、収穫のときを迎えようとしている」(次回に続く)